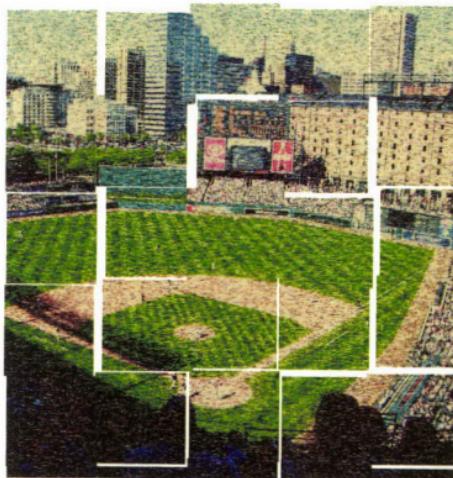


# ベースボールを 読む

吉田恭子



## 目 次

はじめに——野球例外主義 ..... 5

第1章 ベースボールの履歴書——裏通りから巨大ビジネスへ 11

バット・アンド・ボール・ゲーム

遊戯の職業化

ニグロリーグ

デッドボールからライヴボールへ

戦争と野球

拡張の時代

——ナショナル・パスタイムからインターナショナル・パスタイムへ

遊戸の精神——メジャーだけがベースボールじゃない

第2章 ベースボールの文化表象 ..... 27

パストラルの詩学

郷愁と風刺

皮肉と感傷

神話と野球文学

マジック・リアリズム

第3章 「なぜ書くか」をいかに読むか

——隠喩媒体としてのベースボール ..... 45

イノセンス

めぐる季節

ノスタルジア

逸話が伝える記憶  
パストラルの時空間  
マジック・リアリズム  
野球と民主主義  
アメリカの夢、アメリカ人の条件  
野球文学の水脈

第4章 最初の野球映画「最期の試合」 ..... 59

国民的遊戯の創生  
走れ、ウイリアム  
10人のインディアン——消えゆく先住民たち  
文化的食人——人間からシンボルへ  
ネイティヴ・アメリカン・パスタイム

第5章 フィールド・オブ・アメリカン・ドリームス ..... 79

父と子の和解の物語  
テイク・ミー・トゥー・カムデン・ヤーズ  
幸せは緑色  
J·D·サリンジャーからテレンス·マンへ  
ジェイムズ·アール·ジョーンズの数奇な野球人生  
見えない人間たち

おわりに——野球の明白なる運命 ..... 99

読書案内——ベースボールをさらに読む50点 ..... 102

## はじめに——野球例外主義

「アメリカの心と精神を知りたい者は野球を、野球のルールとありさまを学ぶがよい」<sup>1)</sup>

フランス生まれで米国に帰化した教育者で野球ファンでもあったジャック・バルザン（1907-2012）のことばは、アメリカにおける野球の重要性を強調するさいに必ず引用される。今日、野球がアメリカ市民一般の心と精神を映し出しているかどうかは疑わしい。しかしこで検討したいのはその真偽ではなく、ファンが抱くベースボール像である。

- 命の営みと同じく春に始まり秋に終わる
- ゆったりとした時間の流れでのびのび遊ぶ球技
- 同時に瞬間のスピードがすべてを決定する

---

1) Barzun, Jacques. *God's Country and Mine: A Declaration of Love Spiced with a Few Harsh Words*. New York: Little, Brown & Co, 1954. p.159.

- 守備側が球を保持する唯一の球技
- 9人それぞれの特技に応じた役割が割り振られる
- 同時に9人すべて平等に打席のチャンスが与えられている
- 投打の一対一の決闘と自己犠牲を伴うチームワークとが併存する
- 球場外に球を飛ばすことで得点できる唯一の球技
- ファウルラインは無限に伸びる直線であり、野球は無限の空間でプレーされる
- 時間制限によって試合が構成されず、原則的には勝負がつくまで、無限の時間の中でプレーされる
- 帰郷を目的とするゲーム
- 統計的記録が重要な役割を負うことで歴史性を持つ
- 時代を超えて変わらないゲーム

必ずしも野球だけに当てはまらなかったり、野球の現実を反映していない部分もあるのだが、これらの常套句を総合すると、ベースボールは自然の緩やかな流れと歩調を合わせつつも、ドラマチックな瞬間が前触れもなく訪れ、個人主義的なおかつ民主主義的であり、個人と団体の双方を重んじ、無限の時空間を舞台とする、数字で客観化できる歴史をもった懐古的スポーツであると捉えられている、ということになるだろう。

野球を「民主主義的」であるがゆえに愛すると告白するファンが日本にどれだけいるだろうか。そして本当の

ところ、野球は民主主義的だろうか。まさしく、野球そのものというより、野球を語ることばこそが、かくあれかしと願う人々の願望を反映しているのだ。

興味深いのは、野球がしばしば他の球技と比較された上で例外とされる点である。速くない、攻撃側が球を持たない、時間の区切りがない、ラインに終わりがない……と数々の例外によって定義することができるゲームこそが、アメリカの「<sup>ナショナル・パスタイム</sup>国民的遊戯」とみなされている。

また、大リーグの優勝決定戦がワールドシリーズと称されるのも、ベースボールがアメリカだけのスポーツであるという意識の現れであろう。バルザンが「神の国であり私の国」と呼んだ原理国家アメリカ合衆国では、ピューリタニズム、共和主義、私有財産の不可侵、明白なる運命論といった国是が「米国例外主義」を育む温床となってきた経緯がある。これに倣い、アメリカのファンがベースボールの「特別」を重んじる気風を「野球例外主義」と呼ぶことにしよう。

本書の目的は、アメリカの「国民的遊戯」と称されるベースボールが文学作品や映像作品で表現される際に見られる特徴を分析することで、そこに透けて見えるアメリカ文化の姿、人々の希望と欲望、端的に言えばアメリカの神話としてのベースボールを考察することである。

競技人口や観客数を見れば、野球はもはやアメリカ第一のスポーツでない。にもかかわらず、人々は今日も飽

きることなくアメリカの象徴としてベースボールに言及する。ベースボールの重要性や象徴性は、このスポーツそのものの世界、いうなればベースボールのプレーの中に自律的に存在するのではない。ベースボールといういわば単なる遊びがことばによって意味づけされるとき、その歴史があたかも首尾一貫した物語であるかのように語られるとき、そのイメージが人々に消費される映像作品として流通するとき、ベースボールは表象され、比喩的媒体としての価値を帯びてくることになる。ベースボールそのものが国戯なのではなく、ベースボールをめぐる表象が国戯としてのベースボールを支えているのだ<sup>2)</sup>。しかもベースボールの表象体系は他のスポーツのそれよりはるかに蓄積があり洗練されているため、国家の神話や理想化された過去などのメッセージを伝えるのにきわめて高い効果を發揮する。本書では具体的な小説と映画を題材に、表象されたベースボールを「読んで」いこう。

本書は5章からなっている。最初に第1章で、ごくごく手短にアメリカ野球の歴史をおさらいしておきたい。つづいて第2章では、文学作品においてベースボールがどのように表象されてきたのか、5つのキーワードを通して簡潔に紹介する。第3章からは、具体的に文学作品と映画作品を扱う。野球や野球小説に慣れ親しんでいる読者は、第3章から読み始めてもらってかまわない。まず第3章では、アメリカの小説家ポール・オースターの掌編「なぜ書くか」(1996)を題材としてテクスト精読

を行う。野球の文化表象にくりかえし現れる特徴を整理することで、隠喩媒体としてのベースボールを「読む」下準備をしてみよう。第4章では、日本でほとんど知られていない最初の野球映画「最期の試合」(1909)を紹介する。この短編映画の分析を通じて、ベースボールがアメリカの国家神話成立にいかに寄与しているか、批判的に検証してみよう。最後に第5章は日米両国でもっとも広く愛されている野球映画『フィールド・オブ・ドリームス』(1989)を扱う。「癒しの物語」と称されるこの作品を多角的に読みこんでいくことで、ベースボールが隠喩媒体としていかに強力な影響力を行使し、アメリカ的価値観を伝播するのか、考察してみよう。

ところで、日本に住むわたしたちがアメリカのベースボール表象を詳細に分析することにどのような意義があるだろうか。日本人大リーガーの活躍目覚ましい今日、メジャーリーグ(MLB)<sup>3)</sup>関連のニュースを目にしない日はない。また、アメリカの野球文化や歴史を紹介する日本語書籍も数多く、野球小説や野球映画も多数翻訳紹介されている。しかし、これらはいずれも消費的受容を

---

2) 米国大使館のウェブサイトには、「米国のスポーツ」というページがあり、スポーツが米国的价值觀（自由・正義・フェアプレー・チームワーク・自己犠牲など）をいかに称揚するものか広報しており、野球にも少なからぬ言及がある。*About the USA.* [aboutusa.japan.usembassy.gov/jl/jusaj-ejournals-sports.html](http://aboutusa.japan.usembassy.gov/jl/jusaj-ejournals-sports.html)

3) 独立した組織だったナショナル・リーグとアメリカン・リーグは、2000年に一つの法人 Major League Baseball (MLB) となった。したがって、MLBという呼称は2000年以降の法人に用い、それ以前は大リーグ、メジャーリーグ、プロ野球などと表記する。

目的としている。ベースボールとは似て非なる「野球」を国民的球技として早くから受け入れ洗練させてきた日本において、単なる受け身の姿勢でベースボールを消費するのはもったいない。日本においてこそ、アメリカのベースボール表象に対する批判的視座が発展することに意義がある。そこからより豊かな野球の理解・アメリカの理解・文化表象の理解が生み出されるのではないだろうか。

またベースボールを、ただ彼の国で語られるままに受け入れるのではなく、批判的に読むということは、ある表象体系に潜在するイデオロギーを炙りだす作業でもある。そのような読解力は、きわめて洗練された情報操作がいかにわたしたちの「共有される価値観」を日常生活のあらゆる側面において形成しているのかを意識する手助けになるだろう。

このような野心を抱いている本書であるが、野球の文化表象をめぐる問題を網羅するにはあまりにも紙数が足りない。あくまでも文化としてのベースボールを読み始めるきっかけにすぎない。巻末の読書案内では、ベースボールを扱った主要な文学作品や映像作品に加え、ベースボールを批評的に読む手助けとなる日本語・英語の文献・資料を紹介している。これらを手がかりに、ベースボールの無限の時空間に乗り出してほしい。